

地域漁業におけるサケ定置網漁業協業化の形成要因

と経済的意義に関する研究

- 大樹サケ定置共同経営体・八雲町サケ漁業振興会の事例より -

共生基盤学専攻 共生農業資源経済学講座 水産経営経済学 藤井駿

1. 背景

近年、サケの来遊数が減少しサケ定置網漁業の経営悪化が進む中で、協業化（経営の共同化等）を進める動きが見られる。しかし、漁業者が難色を示し合意には至らない場合も多い。協業化を進めるためにはそのメリットを見出すことが大切である。加えて、地域漁業に及ぼす影響に関する考察も必要だが、それに関しては研究の蓄積が不十分である。

2. 目的と事例地域の選定

本論文では事例地域において、協業化の合意形成過程を把握し、協業化が形成された要因を明らかにする。その上で地域漁業の再編成等の観点から、協業化の意義を考察する。

なお事例地域は、地域漁業におけるサケ定置網漁業の役割として対照的な特徴を持つ大樹町と八雲町を抽出した。大樹町はサケ定置網漁業が基幹的な漁業となっており、協業化を活かした地域漁業管理に取り組んでいる地域である。八雲町はホタテガイ養殖業が基幹的な漁業となっており、サケ定置網漁業の協業化がそれを支える役割を果たしている地域である。

3. 結果

本論文で分析した2地区の事例では、協業化の形成要因としてそれぞれに特徴が見られたが、共通する特徴として以下の3点が挙げられる。第1に、サケ資源の共有である。孵化放流事業によって支えられているサケ資源は漁業者全員がその利益を享受すべきという考えのもとに、協業化は進められている。大樹町では漁業者全員がサケ定置網漁業に従事できる体制が取られており、八雲町では漁業者全員がサケ定置網漁業に従事せずとも利益の配分を得られる体制が構築されている。第2に、基幹的漁業の経営悪化である。危機的な状況において、漁協と漁業者が一丸となって問題の解決に取り組むことで、協業化が形成されやすい環境が生み出されている。第3に、自らの不利益を顧みず主導していける者の存在である。一時的な損失を考えるのではなく、将来を見据えた考えを漁業者が持つことが重要になる。

協業化の経済的意義については、一般に経営改善効果等が挙げられるが、本事例ではこれら以外のものも抽出された。本事例では以下の2点が共通点として挙げられる。第1に、後継者確保の一助となっている点である。2地区共に、後継者層への就業機会創出と収入面で重要な役割が見られる。第2に、地域漁業管理における役割が挙げられる。大樹町では、着業漁業種類を制限したことで地域内における漁業資源の維持が可能になった。八雲町では、漁業者の生活の下支えとなり、ホタテガイ養殖業に専念する環境が作り出されている。